

ツマグロヨコバイ（イネ萎縮病）

○ 被害と発生生態

ツマグロヨコバイはイネを吸汁加害する。吸汁による被害はほとんどないが、出穂期前後に多発すると排泄物により穂が黒く汚れるすす病が発生する。

ツマグロヨコバイは、水田内外のイネ科雑草で越冬し、イネが植え付けられると移動し水田内で3～4世代を過ごす。暖冬の年には越冬量が増加し、その後の発生も多い。さらに6～7月が高温の年には発生が助長され、9月以降、多発生することがある。

イネ萎縮病は、主にツマグロヨコバイにより伝搬されるウイルス病（病原ウイルス：イネ萎縮ウイルス）である。病原ウイルスはツマグロヨコバイで経卵伝染するため、次世代以降も永続的に伝染する。

イネの症状は分けつ期頃からみえはじめ、健全なイネと比べると株は萎縮し、葉色は濃い緑色になる。また、葉にはあざやかな白い斑点が葉脈に沿って連続して生ずる特徴がある。イネ生育期の早い時期に感染すると出穂しないことがある。また、発病した株はいつまでも濃い緑色のままであるが、枯れることはほとんどない。しかし、出穂した穂は小さく、不稔が多く減収となる。

○防除方法

（ア）耕種的・物理的防除

- ・極端な早植えおよび多肥栽培を避ける。
- ・ツマグロヨコバイの増殖源である休耕田のすき込み、畦畔雑草の刈り取りを行う。
- ・罹病株は可能な限り抜き取る。

（イ）薬剤防除

- ・本田初期のイネ萎縮病伝搬防止のため箱施用剤による防除を行う。
- ・本田での防除時期は、越冬後第1世代成虫が水田に侵入してくる6月4～5半旬頃である。



成虫（雄）



成虫（雌）



幼虫



イネ萎縮病の病徴